

区画・再開発通信 2024.5 vol.653

めざせ!! 住民主権のまちづくり

もくじ

発言／半世紀を経ての再開 熊本一規
各地／豊島 自ら作成した街づくり推進条例に違背
鎌倉 「飛び施行地区」区画整理始まる
小諸 新幹線来ず、商都・小諸の今
ルポ／超高層に都計審が「強引に進めるな」

解説／小規模区画整理あの手この手
解説／「忘れた頃にやってくる清算金」を試算
本棚／『かくれ里 愛蔵版』
本の紹介／知は力なり 区画整理・再開発の本
夏の自治体議員研修セミナー 8月19日



半世紀を経ての再会

熊本一規 (明治学院大学名誉教授)

二〇一一年福島原発事故の際、原発を推進してきた勢力が「原子力村」と呼ばれて、その在り方が問われたことは記憶に新しい。
だが、原子力村と同様の構造は、工学の多くの学問に存在する。なかでも建設系工学には、その傾向が顕著である。工学に関連した業界や役所に人材を供給することが、そもそもその学科創設の目的だからであり、また建設系工学の業界は、国や都道府県等の公的部門の支出に依存するところが大きいからである。
そのため、原発の意義を問うた小出裕章氏ら京都大学熊取六人衆の方々が原子力村の中で冷遇されたことに示されるように、工学部において学問・研究の在り方を問うことは、冷遇されることを覚悟しなければならない重たい

行為である。

東大都市工科大学院の取組み

約半世紀前、工学部において学問・研究の在り方を問うた取組みがあった。東大都市工科大学院における取組みがそれである。東大都市工学科は、都市計画部門と衛生工学部門から成る学科であるが、建設省・厚生省によって設立が企てられたこともあり、また、いわゆる御用学者が多かったことも



あって、学問・研究のあり方が問われたのであった。

当時、衛生工学部門では、1教授が、飛騨高山の水道水の安全性について、現地調査もせずに安全との見解を示したことが問われていた。また、静岡県駿河湾が製紙工場からの排水でヘドロの海と化していることについての取組みが院生によって行なわれていた。都市計画部門における具体的取組みは特に聞かなかったが、当時まで存在していた旧都市計画法が「国が都市計画を定める」旨の法律だったため、問題は山積していたはずである。

学問・研究のあり方を問う院生の取組みの成果として、都市工学科の建物（工学部八号館）のうち三階は、院生の自主管理空間となっていた。当時、都市工学科の宇井純助手が主宰していた自主講座は、全国各地の住民運動の報告を聞ける場として有名になっていたが、その運営のための部屋も自主管理空間の一部を構成していた。
都市工学科への進学から漁民連・住民運動支援へ

都市工学科院生の取組みに共感を覚えた私は、専門課程への進学の際、都

★熊本一規(くまもと かずき)先生 1949年佐賀県小城町に生まれる。1973年東京大学工学部都市工学科卒業。1980年東京大学工学大学院博士課程修了(工学博士)。1987年より明治学院大学に就任し、現在明治学院大学名誉教授。ごみ・リサイクル問題で市民サイドからの政策批判を行なうとともに、埋立・ダム・原発・都市政策で漁民・住民のサポートを続けている。著書『これでわかるごみ問題Q&A』(合同出版, 2000年)、『日本の循環型社会づくりはどこが間違っているのか?』(合同出版, 2009年)、『海はだれのものか』(日本評論社, 2010年)、『脱原発の経済学』(緑風出版, 2011年)、『よみがえれ! 清流球磨川』(共著, 緑風出版, 2011年)、『漁業権とはなにか』(日本評論社, 2018年)、『権利に基づく闘い』(緑風出版, 2022年)など多数。

市工学科に進学し、その後大学院にも進学した。

一九七六年夏、博士課程二年の時、宇井純助手からの話で、大規模工業開発に反対していた志布志湾住民運動の支援に思い始めた。以来、当初は予想もしなかったが、志布志湾には一九九一年まで一五年間も関わり続けることとなった。志布志湾では、当初は大規模工業開発に代わる地域振興策の作成に取り組んだが、それを一年後に作成し終えた後は、漁民の持つ漁業権に着目し、如何にして漁業権で埋立を止めるかの、今ではメインテーマになっている研究に没頭していった。

志布志湾以降も、沖縄県石垣島の新石垣空港問題、佐賀県唐津市の佐志浜埋立問題、大分県佐伯市の大入島埋立問題、長崎県の諫早湾干拓問題、熊本県の川辺川ダム問題、岐阜県の徳山ダム問題、山口県の上関原発問題、島根県の島根原発三号機問題等々の埋立・ダム・原発問題に取り組むこととなった。「漁業権で事業を止める手法」が注目されたからである。

都市計画道路拡幅問題への関わり

築地市場の豊洲市場移転問題で助言

を求められたことが縁となって、同問題に深く関わってこられた水谷和子さんからの紹介・依頼を受け、二〇一九年からは都市計画道路問題にも関わることとなった。都市計画道路の拡幅計画で、住居の一部が削られたり、立ち退きを迫られたりする問題で、主として、杉並区の西荻窪補助一三二号線及び武蔵野市の女子大通りに関わった。

四十数年ぶりに都市計画の分野に戻ったことになるが、「漁業権で事業を止める手法」が都市計画に反対する運動にも「財産権で事業を止める手法」として応用できることが分かったのは、私にとっても大きな収穫であった。

さらに、最近になって、近年の局的豪雨により善福寺川がしばしば氾濫することの対策として、東京都によって善福寺川調節池の建設がもくろまれ、多くの世帯が立ち退きを強いられようとしている問題でも、女子大通り拡幅反対運動の経験が大いに役に立つ状況が生まれようとしている。

岩見良太郎氏との再会

二〇二三年、西荻窪の道路拡幅反対運動を担っている中野千枝さんたちが岩見良太郎埼玉大学名誉教授の学習会

を主宰されたことから、岩見氏と約四十年ぶりに再会することができた。

岩見氏は、当時、大変優秀な先輩として院生の間で知られていたが、大学院修了後も都市計画や区画整理・再開発問題等で住民の側に立って活躍されていることは存じ上げていた。

岩見氏にも再会を喜んでいただいたが、当時差し上げた自製パンフレット「生命復権の計画論」を丹念に読んでおられていたことには、私のほうが感激し、有難く思った次第である。

振り返ってみれば、岩見氏は、この四十数年間、一貫して住民サイドに立った都市計画を追求されてこられたことになる。他方、私は、大規模開発に反対する住民運動に関わったことから、漁業権や埋立問題を主要テーマにすることとなったが、四十数年を経て都市計画をサブテーマとするに至ったことになる。

四十数年間のそれぞれの経験を経ての再会は、大変感慨深いことである。今後、岩見氏や区画整理・再開発対策全国連絡会議との交流を通じて、都市計画問題に少しでも貢献することができれば、と念じている。